Perrotin

Harper's Bazaar,

Harper's Bazaar Japan

January 2025

アンジェラ・レイノルズ×シグリッド・サンドストローム：「黄昏」をめぐる時間について

ペロタン東京のディレクター、アンジェラ・レイノルズとアーティストの対談連載vol.4は、ペロタン東京で個展「DUSK」を開催中のシグリッド・サンドストロームが登場。スウェーデン出身のシグリッドが幼少期から親しんできた自然へと向けるまなざしから、アンジェラが感じ取ったこととは。季節や時間、そして場所――その移ろいが生み出す色彩の層は、2人の対話へと折り重なっていく。

BY HARPER'S BAZAAR JP 公開日:2025/01/31

PHOTO: AYUMI YAMAMOTO

シグリッド・サンドストローム（右）と、ペロタン東京ディレクターのアンジェラ・レイノルズ。個展「DUSK」の会期は2025年3月22日まで。（アンジェラ着用：ジャケット ¥154,000、トップス ¥126,500、パンツ ¥92,400 MADISONBLUE　Hair & Makeup: Yuco Aoki）

アンジェラ：この連載は今回で4回目になります。この対談シリーズのきっかけのひとつには、私自身が現代アートに出会って大きな影響を受けたことにあるんです。私はアートを専門的に学んだことはなく、異なるバックグラウンドから来ました。でも、現代アートに触れて少しずつ知るなかで、心の深い部分を揺さぶられる体験をして、もっと学びたいと思うようになりました。

私にとって大事なのは、必ずしも「教養のある観客」や「現代アートについて学びたいと思っている観客」だけに向けられたものではないということなんです。アートには人間の根本的な部分に訴えかける力がある。それこそが本質的な魅力だと思っています。だからこそこの対話では、学術的に寄りすぎるのではなく、自然な会話を届けられたらいいなと思っていて。

シグリッド：こうやって打ち解けた雰囲気のなかでお話しできるのはすごくありがたいし、楽しみです。

「自然」から考えさせられること

アンジェラ：シグリッドさんの絵には、自然との深い結びつきを感じます。時間帯による空や風景の微妙な変化や、光と色の移ろいが繊細に表現されていますよね。物が薄明かりのなかで柔らかく、ほのかに覆われているように見える様子も印象的です。

作品に漂う微細なニュアンスや穏やかに広がっていく感覚は、広大な海や自然を前にしたときの瞑想的な気持ちを想起させるのですが、シグリッドさんは、普段、自然のなかで過ごす時間を大切にしていたりするんでしょうか？

COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN.

シグリッド・サンドストローム《Ashen Glow》(2024)　カンヴァスにアクリル絵の具　100×100 cm

シグリッド：そうですね、2つの答え方ができるかもしれません。ひとつは、絵を描くという行為そのものが、私にとって瞑想的な側面を持っているということ。必ずしも幸せだと感じるわけではないのですが、いわゆる“ゾーン”に長い時間入っているような状態になるんです。ただ、頭で「これに集中する」と明確に認識しているわけではなく、進めていくなかで自然と発展していく。そんな感覚に近いですね。

もうひとつ、自然については、私にとって子どもの頃から身近で重要なもの。さまざまな理由から、私たちは自然の中に身を置いて、自分を超えた何か大きな存在に溶け込もうとするんじゃないかなと思う。私にとっては、自我を手放す究極の方法でもあると感じます。

自然のなかを歩いたりハイキングしたりすることが多いのですが、歩いていると、ナルシスティックな部分や内面的な葛藤から解放されて、心を開いていく感覚になります。自然はそのプロセスを助けてくれると思います。

PHOTO: ERIK SIGGE

スウェーデンのアトリエで制作するシグリッド。

アンジェラ：とても共感します。私はよく海に行ってサーフィンをするんですが、自然のなかにいると、何かを成し遂げたり、何者かになろうとしたりしなくても、ただ「いる」だけで十分なんだと実感します。

シグリッド：私も同感です。今、東京という極めて都市的な環境にいますが、普段私が住んでいるのはスウェーデンの都市。東京の1400万人という人口に比べたらずっと小さい街です。スウェーデン全体の人口が約1000万人ですから。

雪が降ればスキーでアトリエまで行けるんですよ。クロスカントリーをしていると、雪のなかで浮かんでいるような、自然へ溶け込んでいく感覚になるんです。

© SIGRID SANDSTRÖM

12月に撮影された、スウェーデンのリンデスベリという街に位置するシグリッドのアトリエ。

「黄昏」という時間に感じ取るもの

アンジェラ：今回の個展のタイトルにある「DUSK」（黄昏）というのは、特別な、心に響く時間帯を表していると思います。私も海と過ごしている時間のなかで、黄昏や夜明けを「時間がまるで止まっているように感じる瞬間」だと捉えるようになりました。自然が息をひそめているような、空気そのものが揺らめいて、不思議な魔法がかかっているような。同時に、その静けさがもたらす広がりも強く感じます。

PHOTO: AYUMI YAMAMOTO

シグリッド：そうですね。一方で、黄昏という言葉には、別のメタファーも込められているかもしれない。この時代において、黄昏はある種の政治的な意味を持たせることもできると思いました。時間が限られている、何かが変化していくという感覚ですね。

アンジェラ：それは、いわゆる「メメント・モリ」的な意味もあるのでしょうか。

シグリッド：そうですね。私にとって、父親が亡くなったことなど個人的な背景もあるのですが、世界的な政治の状況も含めて、現代では物事がとても厳しい方向に進んでいるように感じていて。そういった側面も確かに影響しているはず。

アンジェラ：少し飛躍しますが、子どもの頃、私は一人部屋を持っていた時期があって、夜がすごく長く感じたことを覚えているんです。きっとそれは、なかなか眠れなかったから。でも、窓のすぐそばにベッドがあって、月が見えたり月明かりが部屋に差し込んだりするのを楽しむようになって。暗闇のなかで、自分の内面的な世界が広がっていくのを感じました。それは「内なる宇宙」を感じ取る時間でもあったし、想像力を育ててくれたようにも思います。暗闇が人に与える影響というのはすごく面白いですよね。スウェーデンでは季節の移り変わりを通じて、暗さや光の違いをより深く体験できるのではないでしょうか。

シグリッド：冬時間になると、明るさの変化は本当に“ショック”です。本当に突然、日がすごく早く沈むようになるから。自分の人格が夏と冬でまったく別人みたいに感じるほどです。

COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN.

シグリッド・サンドストローム《Spectra》(2024)　カンヴァスにアクリル絵の具　100×100cm

シグリッド：季節の違いによる作品への影響はあると思いますが、同時に、制作するときには展示される場所やその環境を意識して描いている部分もある。たとえその場所について詳しく知らなかったとしても。例えば今回は東京での展示では、季節がちょうど「中間的な暗さ」の時期にあたるというのは知っていました。だから、今自分がいる場所と、作品が向かう場所の両方を考えながら制作するという感じですね。

色彩がカンヴァスに現れるまでの“時差”

アンジェラ：では、色彩へのアプローチについて伺いたいと思います。色の広がりやカンヴァスを通り抜けるような質感、そして力強い筆づかいや、緊張感のある円や線の共存がとても魅力的です。どのような道具や素材を使っているのか、また、どの程度計算されているのか、即興的なプロセスをどれだけ大事にしているのか、お聞きしたいです。

シグリッド：とても薄い液体状の水性絵の具を使うのが好きです。そうすることで速乾性のある薄い層を重ねていくことができて、立体的ではないけれどコラージュのように重なり合う層を作っていく。ただ単に並べるのではなく、重なり合う要素として扱うんです。

そういう意味では、自分なりの方法論のようなものはあるのですが、ひとつの絵が完成するまでにどうなるかという具体的なイメージは、これまで一度も持ったことはありません。それが今でもこの作業に興味を持ち続けている理由だと思います。

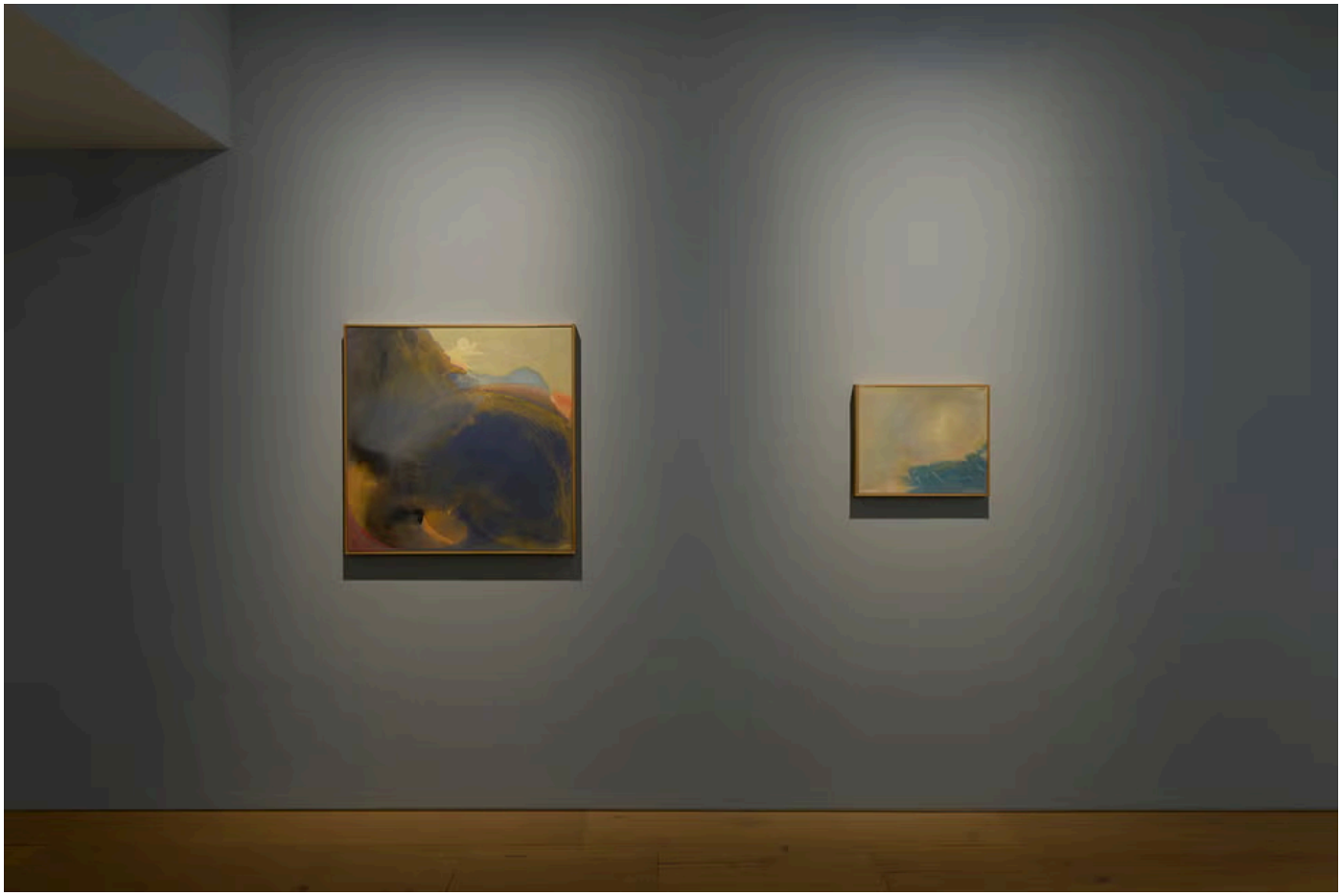

PHOTO: OSAMU SAKAMOTO COURTESY PERROTIN.

「DUSK」の展示風景より。

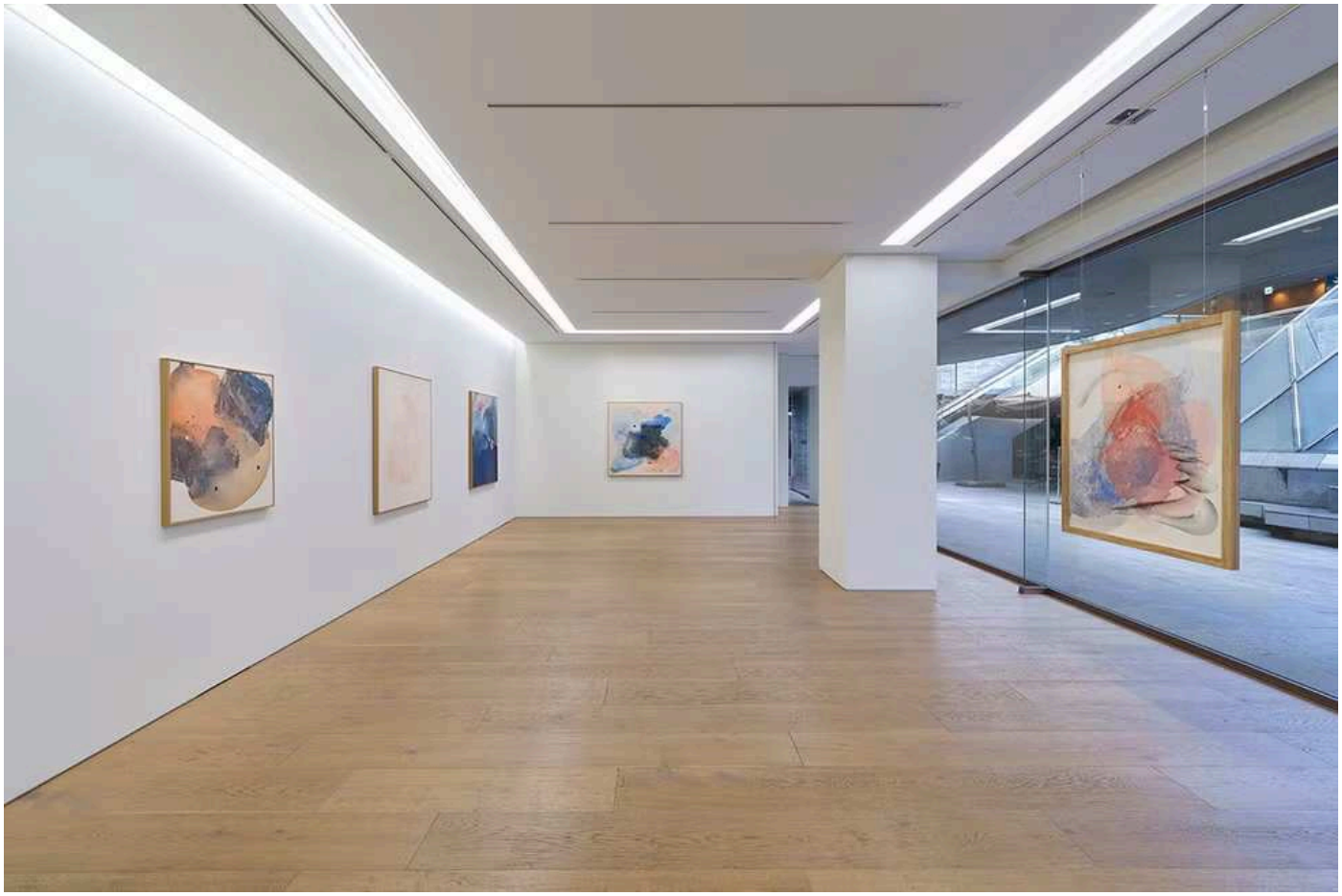

PHOTO: OSAMU SAKAMOTO COURTESY PERROTIN.

シグリッド： 唯一、永遠に“忠実”であると感じている色があるとすれば、それは青。青には、重みを持つ暗い深みがある一方で、軽やかな光をも感じさせる何かがある。夜空や非物質的で儚いものを連想させる色だからでしょう。だからこそ、重厚でありながら、より深い空間や質量を超えた何かを暗示する色だと感じるんですね。

PHOTO: MENGQI BAO COURTESY OF THE ARTIST AND PERROTIN.

《Shadows of Time》(2024)の細部。カンヴァスにアクリル絵の具　125.4×125.4 cm

アンジェラ：確かに、青がいつもどこかに染み込んでいるように見えます。旅をするとき、例えば今回の日本での滞在中で、いつもとは異なる光や色合いが見えてくることはありますか？

シグリッド：今、感じているのは、日本の建物は灰色やベージュを基調にしていることが多くて、そこに茶色や濃い茶色のディテールがあることが多いのかなと。色の幅が狭いという意味ではなく、同じ色調のなかで繊細に変化している印象を持っています。一方で、ストックホルムの街の建物はもっと明るい色が一般的で、ピンクやオーカーの間のような色合いが多いんです。それは冬の暗さのなかで選ばれた明るい色、という理由があるのかもしれない。

確かに、旅をしたり異なる地に滞在したりすると、現地の色彩や文化が影響を与えるのは間違いないけれど、その影響が作品に即座に現れることは少ないですね。むしろ遅れて出てくるんです。例えば、ロサンゼルスに滞在していた時期があって、絵の色がどんどん明るくなっていくのを自分でも感じたのですが、その変化を実感したのはロサンゼルスを離れた後だった。

だから、旅先や滞在地の風景や光が自分に与える影響はあるけれど、それがいつ作品に現れるのかは自分でもわからないことが多いです。ある文化や場所に身を置くことで得られる経験や感覚は、私のなかで「堆積物」みたいになって、いつか自然に形となって現れるんだと思います。

西洋視点の見方を捉え直すこと

アンジェラ：日本との関わりでいうとシグリッドさんは、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』を読まれたことをおっしゃっていましたね。この本では、暗さや自然光の微妙さ、美しさ、感覚的な魅力が賛美されていますが、それは、伝統的な日本の美学の主要な柱の一部だと思います。また、戦後の時代に、近代性や実用性、生産性を追い求めるなかで、これらの価値が失われていったことを谷崎は嘆いています。効率を求めるあまり文化的な価値が損なわれるというこの闘いは、今の時代においてますます重要に感じられます。

シグリッド：私はテクノロジーの進化にはついていけていない部分もありますが、そういった議論自体が面白いとも思っています。西洋の哲学的な歴史的観点から見ると、啓蒙時代によって形成されてきた「明確さ」という考え方がある。だからこそ、明確さがどうしてそんなに大切なのかと問い直すことが面白いと思う。明確さよりも微妙な不明瞭さが、より価値のあるものとして考えられるべきかもしれないという視点が重要なのではないかって。

PHOTO: AYUMI YAMAMOTO

シグリッド、ペロタン東京の会場にて。

アンジェラ：特に日本人にとって、また、西洋の影響が歴史のなかで強くなった他の文化にとっても、非常に興味深くかつ重要だと思うのは、文化の発展がある時点で急に脱線したということ。

シグリッド：まるで中断されたように、ですね。

アンジェラ：ええ。まったく別の木から枝を加えて、皆がその枝を追わなければならないように強制されているような気がします。私たちはそのことを忘れがちですが、その不一致や不適合のために、自分たちが劣っていると感じ、西洋哲学にもっと従わなければならないと感じさせられてしまうということ。

シグリッド：西洋には、まだ“大きな西洋”を見つめている“小さな西洋”がたくさんある。また、その文化を消費文化という大きな一般化で切り取っています。だから、今ではすべてが政治的に消費資本主義に乗っ取られてしまっていますね。

アンジェラ：谷崎は本のなかで和紙についても触れています。西洋の紙は光を反射するけれど、和紙は光を吸収するのだ、と。シグリッドさんは既にカンヴァスをそのように使っていますし、きっと和紙に興味があるのではと思うのですが、いかがですか？

シグリッド：実は今日、和紙の専門店へ足を運ぼうと思っているんですよ！　私の絵にも、たくさんの秘密や隠された部分が層の下にあるので、和紙の性質にすごく興味があるんです。

絵の“裏と表”、そしてその境目

シグリッド：数年前のことなのですが、ある作品で「失敗した絵」というか、ちょっとしたミスをして、「あ、これはダメだ」と思って、絵を壁に向けて置いたんです。でもその後に絵の裏側を見てみたら、わずかにイメージが透けて見えてきて、すごく興味深いと思ったんです。ちょうど夕暮れ時のように、柔らかい雰囲気を作り出すのだけど、何を見ているのかはっきりとわからない。

それで、絵の裏面が別の命を持つことができるんだということに気づきました。ちょうど広い縦長の空間で大きな展示の機会があったので、観客が歩きながら、絵が立体的に立ち並んでいるような形で見るのが面白いんじゃないかというアイデアが湧いて。来場者が、まずは絵の裏面から順に鑑賞し、振り返ることで、新たな発見があるような展示にしました。

PHOTO: AYUMI YAMAMOTO

後ろに写る作品は《Borealis (Verso)》（2024）。天井から吊り下げられ、裏側に回ってカンヴァスの裏を見ることができる。

アンジェラ：裏側に回って見るというのは、鑑賞者にとって作品とよりインティメイトな感覚を生み出すと思います。

シグリッド：それに、いつも自分自身も驚かせていたいと思うんです。変化とは、満足できないこともありますが、それでも次に進むためのきっかけを得ることができるから。また、両面を持つ絵が面白いのは、通常の絵画が表（おもて）を中心にしているのに対して、「表面」という概念がなくなり、薄い構造のようになるという点です。絵の「皮膚」が裏と表で共有されて、分離することができないという感じですね。

さらに、たとえ両面があると知っていても、実際には片面しか見られないということも面白いですね。どちらも見ようとすると、身体や記憶、経験に頼らなければならなくなる。反対側を見ようとすると、それまでのものがぼやけてしまう感じです。

アンジェラ：自分が意識して取り組んでいることが、必ずしも思い通りの結果にならないこともある。でも、その裏には別の側面があって、結果としてはまた違った形で成長する、というのは人生にも通じるものがありますよね。

シグリッド：本当に、人にも当てはめることができますね。そういえば、2000年代から屏風絵に興味を持っていろいろと調べるようになったのですが、屏風絵のように、物事が展開していくのを見たり、時間の使い方について考えたりすることが、制作する側にも観客にも異なるアプローチを生み出すと思うんです。「動きながら見る」というのは異なる体験ですから。屏風に触れ始めて、それがただの飾りとして存在しているのではなく、空間を分けるもの、会話のきっかけになるもの、絵を見る別の方法であるということを知ったんです。

また、中国や日本の絵巻物などは、西洋の美術史とはまったく異なることに気づかされますよね。西洋では、消失点という技法が確立されて、そのシステムから抜け出すのがほぼ不可能なことのように思えますが、実はそれは「真実」ではなく、構築されたものにすぎません。

アンジェラ：すごく面白いですね。次回、シグリッドさんが日本にいらっしゃる際には、私の視点からも、日本の面白さを感じられる場所を考えておきますね。今日は本当に素敵なお話を聞くことができて光栄です。

シグリッド：私も、アンジェラさんが深い視点から作品を見てくれて、すごく嬉しかった。素敵な時間をありがとうございました。

【アンジェラ・レイノルズ対談シリーズ】
vol.1 連載に向けてのメッセージ
vol.2 ダニエル・オーチャード
vol.3 エイミー・カトラー
vol.5 エマ・ウェブスター

PHOTO: JEAN-BAPTISTE BÉRANGER

シグリッド・サンドストローム（Sigrid Sandström）
1970年生まれ。スウェーデン・ストックホルム在住。地理学、社会学、哲学などをもとにした深い洞察をもとに、知覚と空想を織り交ぜ、従来の抽象画の枠組みを超えた表現を追求する。作品は、ヒューストン美術館、ストックホルム近代美術館、ウルリッヒ美術館などのコレクションに収蔵されている。ニューヨークのクーパー・ユニオン・スクール・オブ・アートをはじめとする教育機関で学び、イェール大学にて絵画を専門とする美術修士号を取得。現在、ヘルシンキ芸術大学の教授を務める。インスタグラムのアカウントは@sigridsandstromstudio

PHOTO: HAL KUZUYA

アンジェラ・レイノルズ（Angela Reynolds）
東京出身。10代からモデルのキャリアをスタートし雑誌やCMなどで活躍をした後、ロンドンに拠点を移す。帰国後の2006年からジャーナリストとして活動。現在はモデル活動と並行して、フランスのギャラリー・ペロタンの東京ディレクターとして多くの展覧会に携わる。インスタグラムのアカウントは@angelarey__

「DUSK」
ペロタン東京
東京都港区六本木6-6-9 ピラミデビル1階
～2025年3月22日